

■おきなわ環境ネット■

沖縄環境ネットワーク通信 16号

*Okinawa...
Where are you going?*



《巻頭言》北朝鮮と中国の旅から

… 宇井 純

《小特集・やんばるの森から》

国頭村辺戸 一般廃棄物処分場問題

… 新垣優子

平均年齢 73 歳！辺戸の元気な青年団

… さあちゃん

やんばるの森が泣いている～大宜味村見学レポート

… 酒井哲哉

講演会を聞いて

… 儀保 昇

第 5 回沖縄県環境影響評価審査会傍聴記

… 内海正三

泡瀬干潟をめぐる市民運動

… 藤井晴彦

沖縄大学の「エコ学園祭」実現に向けて

… 上原辰五

《エコネット》

《環境情報おきなわ》

JAL 915 5:15 (4th) 1

10月～ 2月 3月

北朝鮮と中国の旅から

9月の夏休みを利用して、南北朝鮮と中国へ行って来た。前者はピースボートの企画で後者は日本環境会議の主催する、日中公害被害者の救済に関する共同作業部会に出席するためである。昨年の入院と脳腫瘍の手術があって、海外旅行がすべてキャンセルしたため久しぶりの旅行であった。

南北朝鮮のピースボートの企画はだいぶ苦労したらしい。歴史教科書の問題と首相の靖国参拝があって、北側の神経を逆なでするような日本政府の行動に加えて、従軍慰安婦を含む訪日団の入国を法務省が拒否したからで、このために報復措置として多くの訪朝団の企画が取り消されたようである。ピースボートはそもその発足の時から北朝鮮との付き合いがあって、何とか訪問を特に認められということであった。私はまだ北朝鮮は見えていないのと、親しい友人が北に帰って病気だと聞いて、できれば見舞いもしたいという希望があって、南北朝鮮のクルーズに参加することにした。ピースボートはその企画が始まった時から水先案内人として何回か乗り組んだことがあって、船旅で比較的時間に余裕があるといろいろなゼミナールや座談会などを開いて、これから行く先の勉強をするなどの手伝いをしたことがある。このところしばらく間遠になっていたが、若い人達が自分で企画する点では貴重な事業であり、最近では世界一周を年二回もするくらい繁昌しているようである。スタッフの中には顔見知りも居て、私には居心地のよい旅であった。

* * *

この時期に朝鮮に行くというのはやはり相当に物々しい受入体制を招いたようで、十数台のバスが出迎え、通訳が一台ごとに付いて説明し、勝手な行動は出来ないようになっている。それでも前回の参加者によると多少はゆとりのあるプログラムになっているようで、以前はもっと固苦しかったと言われるとさぞやと思わせるものがあった。行程のほとんどは板門店を含めたいわば名所旧跡に類するものであって、偉大な指導者金日成、その後継者金成日をつたえるものであって、いわゆる社会主義国の中でももっとも個人集中の度が強いものであり、戦前の天皇制を体験した者には六十年昔を思い出させるものであった。旱害、洪水などの天災はどうやら一番苦しいところは切り抜けたそうだが、車窓から見るところでは今年もあまり

宇井 純 （沖縄環境ネットワーク世話人）

作柄はよくないようである。一部では植林の跡もあるが、やはり山手の緑は少ない。平野部では耕地整理は相当進んでいて、水田などは30～50アールの規模になっているが、農作業をしている場面はほとんど見かけなかった。もちろんこれは季節によるものだから一口に判断は難しいが、基本は集団化した農業であろう。農場を訪れたグループの話では、施肥量は日本平均の2～10倍入れているという。これが本当ならば地下水の硝酸性窒素による汚染は相当のものがあろうであろう。

船が着いた南浦でも一部では十数階の高層建築があったが、平壤は都市の中心部は高層化している。だがエネルギーと電力は慢性的な不足なので、エレベーターが止まった高層住宅はさぞ大変なことだろうと思いやられる。一階は商店になっていることが多いが、外から見たところではほとんど空で、およそ物のない街である。もっとも生活必需品の大部分は配給制であるというから、商品経済の占める比率は小さいことになる。それでも私が暮らした1968年のブタペストにはもう少し商品があったことを思い出した。

社会主義国では環境のデータは基本的には国家機密なので、通訳も専門外のことだし、たずねても返しようがあるまい。だがこれまでの体験から、産業公害は相当進んでいると見た方がよさそうである。日本海や黄海の海洋汚染を考える上でも、朝鮮を抜きにしての議論は出来ないだろうが、誇り高い朝鮮にいかにして調査の必要性を説明するかも大変難しい課題であろう。こういう中央集権の体制では、上から命令がかかるまではなかなか研究も対策も進まないだろうと、他人事ながら心配になる。今回まず入り口まで行ったということで満足すべきであろうか。

* * *

この後ピースボートは韓国に入り、私は一日だけソウルの街を歩いたのだが、こちらはまさに資本主義そのものの物があふれる社会であり、その落差の大きさに唖然とさせられた。これはどちらがよいかという比較の問題どころではなく、これほど違った社会が国境を接しているという現実の厳しさと、それに対して何一つ手をさしのべようとしない日本社会の無知さ、無神経さにその中に生きている人間の一人として、たまらない焦りを感じさせられるものであった。

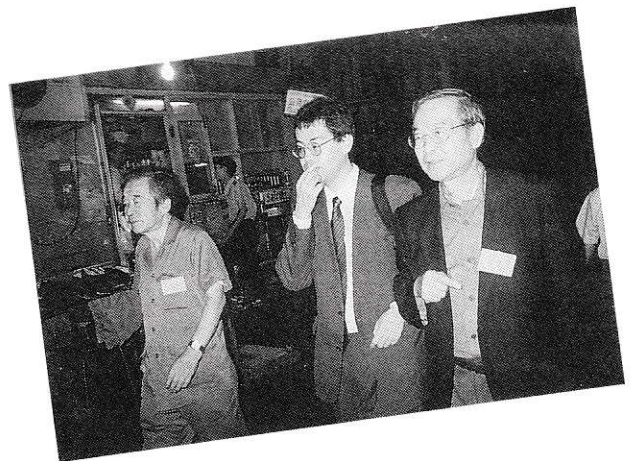
南北朝鮮のピースボートの旅に続いて、9月11日から訪中し、北京で開かれた公害被害者の救済に関する作業部会が、日本環境会議と中国政法大学公害被害者援助センターの共催で開かれ、そこへ出席した。

実は私は、私は中国の公害、環境問題については、いささか二の足を踏むところであった。だいたい社会主義計画経済では、空気と水はタダでいくら汚してもよいという原則で計画が作られているらしく、これでは原料をずいぶん損しているのではないかと思うほど排水や煙を派手に出すものである。しかもデータは国家機密とされて、国営企業の公害を申し立てる者は反体制運動と見なして弾圧されるということが、中国でも最近まであったらしい。こういう歯止めのないところでは公害は極端にまで激化するので、到底私の手に負えるものではない。私が最初に訪中した1973年には、文化大革命のさなかで猛烈な公害を見せつけられ、毛沢東精神で全てが解決するという説明を聞かされたものだから、それ以来すっかり敬遠することにしてきたものだが、80年代末になると様子は多少は変わってきて、環境問題は国家重要目標の一つとして全国的に取り組まれるようになり、中国環境法という専門の新聞も発刊され、30万の部数を誇るようになって来たということは聞いた。中国の急速な経済成長も、下手をすると環境悪化で帳消しになるかも知れないという危機感がひろがったという。水俣病やイタイイタイ病もどうやら氷山の一角を表し始めたようである。それでもこんな重大な問題はなるべくさわりたくないというのが正直なところであった。

そういう過去があって、この会合でも私の報告は多少斜に構えて、皮肉を利かしたもののものではあったが、中国側の取組みは真剣なものであった。公害被害に関する裁判もいくつか提起され、証言する科学者のほとんどが国営企業側についてしまうという困難と、この種の裁判における裁判官の無理解、横行する腐敗の中でも、法学者や弁護士の並々ならぬ努力によって、数はまだ少ないが勝訴にこぎつけた例が出て来るようになった。この会合の空気の中で、はじめは半信半疑であった私も、次第にやはり被害者を助けなければなるまいと考えを変えた。やはり中国側の参加者の熱意に打たれたのである。特に勝敗を度外視しても提訴に踏み切り、困難な条件の中でも子孫のためによい環境を残そうとしている被害者の存在は、水俣病の運動の中でも見られた人間の尊厳を示す行動と相通じるも

のを感じさせられて、いささか逃げ腰であった私の姿勢を反省させられたものであった。

もちろんここで取り上げられた例は、巨大な中国の社会の中で、公害の紛争が毎年数十万件もあるという現実に対しては、ほんの小さな動きにすぎない。しかし、1950年代、1960年代初期の日本の公害被害者運動を見て来た私としては、ここからに逃げ出すわけには行くまいと覚悟を迫られるものがあった。今度の中国訪問から得られるものは、あらためて初心に返っての再出発の決意である。



■写真はいずれも北京にて■

国頭村辺戸 一般廃棄物処分場問題

新垣優子（辺戸出身 現在神戸市在住）

沖縄本島の最北端、琉球開闢の地である辺戸に、国頭村から一般廃棄物処分場建設計画の話が突然やってきたのは、今から2年前、平成11年のことだった。これに対し辺戸区民は強く反発し、一貫して反対の意思を村に対し表明し続けてきた。

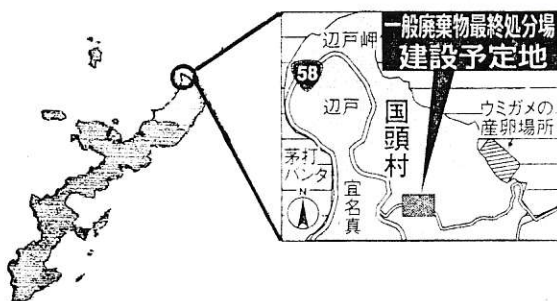
この計画は、あらゆる点で実に多くの問題をはらんでいる。

施設の設計は、旧厚生省の古い基準をもとに設計されている。この基準自体が現在見直し中であり、このような基準をもとに設計される施設の信頼性は著しく乏しいと言わざるを得ない。

予定地周辺の自然環境への重大な影響が予想される。ノグチゲラ、ヤンバルクイナなどの生息が確認されているが、村は自然環境についての調査を全く行っていない。助役は、「生活環境調査で生活に影響がないという結果が出ているから、自然環境にも影響はない」と言い放った。説得力がないどころか、言っている意味がまるでわからない。

予定地の谷の下流の世皮浜(ユシファ)は、沖縄本島にある約300の砂浜の中でも群を抜いてウミガメの産卵が多い砂浜であることが、琉球大学の調査によって明らかにされており、建設・稼働による赤土・排水などによって、ウミガメに対する重大な影響が予想される。しかし、どのような影響を与えるかについての調査は全くなされていない。

予定地の山林は、琉球王朝時代から地元民が山に入って草木の採取を行ってきた場所であり、辺戸区の入会権(いりあいけん)が存在する場所である。従って入会権者である辺戸区の同意がなければ建設をすることはできない。それにもかかわらず国頭村は、辺戸区民には入会権がないなどと主張している。



辺戸区が選ばれた選定経過が実に不透明である。建設予定地検討委員会によって辺戸が選ばれたと村は言う。しかし検討委員会は構成メンバーが明らかでなく、また当初の候補地に入っていなかった辺戸が突然候補地にあげられるなど、選定手順がどのように行われたのかが十分に明らかになっていない。

ざっと上げるだけでも、これだけの問題が存在する。辺戸区民が反対するのも当然であった。

しかし、このような辺戸区民の当然の反対に対して国頭村は、現在使用している安田区の処分場の使用期限が迫ることや、国からの補助金を受ける期限が迫っていることなどから、辺戸への建設の強い意欲を示し続ける。今年になってからは、村は強制着工を匂わせるようになった。

今年の5月、辺戸区民は、自分の出すゴミから考えようと、関東の支援者の助力もあって、「環境青年団」を結成し、自らが出すゴミの減量化をはじめようになり、その後、区のゴミの量は目に見えて減少していった。

他方、区民は関西で処分場の裁判を手がけていた弁護士に接触した。弁護士が調査に行ったところ、すでに4月に、沖縄県に対する設置届が辺戸区に無断で提出されていたことが判明し、着工待ったなしの状況であることがわかった。辺戸区は法的対応を弁護士に委任し、6月11日に建設禁止の仮処分を申請した。

辺戸区民は、6月28日からはテントを設置して座り込みを続けていたが、9月20日、結審5日前にして上原康作村長は150人を動員して着工を強行した。辺戸のおじい・おばあたちはロープを張り、木に抱きついて着工を阻止しようとしたが、役場職員や業者の数の暴力の前ではどうしようもなかった。予定地の山は9割が切られてしまった。

しかし、辺戸のおじい・おばあたちは諦めることなく、今日も予定地で監視活動が続いている。あと数日後に、建設差し止めの仮処分申し立てに対する裁判所の判断が下される。(9月27日)

●事務局注：この後、10月3日に那覇地裁が建設差し止めの仮処分を決定し、同処分場の建設は当面の間不可能となった。しかし、国頭村はこの決定を不服とし、異議申し立てを検討している。

平均年齢 73 歳！ 辺戸の素敵な青年団

Report : さあちゃん

辺戸は、私の母の生まれ故郷だ。子供の頃、学校が休みになるたびに兄妹ごと母の実家へ預けられた。

辺戸といえば、ふかしたイモにウンチエータつぷりの味噌汁、おばさん（母の姉）手作りの、山原の海水を使った島豆腐の味をよく思い出す。アンダギーや黒糖に飽き飽きしていた子供らは、与えられるそれらのおやつに満足することなく野山を駆け巡り、ヘビイチゴや桑の実などをせっせと収穫に出かけた。そこいらで手軽に入手できるシークワサーの絞り汁にグラニュー糖をたっぷり溶かしたジュースを、よく作っては飲んだ。ウチナンチュの通過儀式、ウーヅトシだって経験済みだ。都会育ちの子供らにとって、辺戸での生活は毎日が冒険だった。

そんな山原の生活を待ち遠しく思う日々も、私が中学に上がる頃に終わりを迎える。母の実家が国道の下敷きになったのだ。皮肉なことに道が便利になってしまってから、私の足は辺戸から遠のいてしまった。

年明け頃から、辺戸の不穏なニュースが私の耳には届いていた。ある四月の晴れた休日、ふらっと辺戸を訪ねてみた。十数年ぶりに再開した辺戸は、ある意味私の期待を裏切ることなく、年老いていた。新設された公民館や展望台など、私の知らない風景もあるにはあったが、それらはみな新しいまま遺跡のようだった。これといった観光施設を持たない辺戸の風景は、のんびりと寂し気だ。

辺戸にゴミ処理最終処分場建設が建設されるかも知れないというニュースに、当初「ただ候補地に挙がっただけでしょ」と高をくくっていた私だったが、実際に辺戸に出かけてみてそれどころではないと内心ひっくり返る程慌てた。候補地に挙がったところではなく、建設は辺戸以外にない！とまで言われていたのである。辺戸はいわゆる”オラが村の議員さん”を持たない。のんきな私は、”オラが村の議員さん”がこれほどの権力を持つということを知らなかった。残念なことに”オラが村の議員さん”を持たないということは、嫌われ施設建設予定リストの筆頭に「最優先」に並べられるという運命を、逃れることはできない。

住民の反対運動は「平均年齢 73 歳の環境青年団」が中心となって運営されている。その中で活動している私のおばもすでに 60 を過ぎていますが、建設反対のメンバー中最年少であることを私に自慢する。住民 140 人余りの小さな集落の団体だが、思いのほか若者の参加者は少ない。村営施設で働く年代が多いということもあるのだろう。おじいおばあたちは「若い人たちには、仕事をさせなさい」が口癖である。

国頭村最終処分場建設の経緯



■ 辺戸青年団 HP (<http://kunigami.10mas.com/>) に詳細が掲載されています。

3月27日	国頭村の一般廃棄物最終処分場計画に辺戸区民が村役場で反対表明。双方の対立表面化
3月末	安田区の処分場期限切れ
4月1日	村内の不燃ごみ回収中断
28日	安田区が不燃ごみ受け入れ延長
5月1日	不燃ごみ回収再開
6月11日	辺戸区が地裁に建設禁止仮処分申請
22日	地裁で第1回審尋
26日	村議会、処分場建設工事着工承認
27日	辺戸区民が予定地にテント建設。翌日から監視活動
7月9日	村長ら予定地で理解求める
27日	地裁で第2回審尋
8月1日	村が区に着工通知
5日	辺戸区が抗議集会
7日	業者や村が予定地で区民と対峙（たいじ）。以降、断続的ににらみ合い
18日	推進派が建設推進協議会設立
9月2日	村と辺戸区が公民館で直接話し合うが物別れ
18日	村議会が早期着工決議
20日	村と業者が強制着工
22日	重機を入れ混乱。工事中断
25日	辺戸区、村を相手取り損害賠償求め地裁に提訴。第3回審尋
10月2日	推進協が早期建設求め村に署名提出
3日	郡地裁が建設禁止仮処分

環境青年団が反対の動機に挙げている第一は、その名の示す通り環境破壊だ。レッドデータブックに顔を出す生物がどっちらり棲んでいる山や浜を、どうか壊さないでくれ。孫の時代になっても安心して暮らせる場所を守り抜こう！という主旨での活動だ。実に分かりやすい。

これに対し、建設施設の簡単な説明すらあやふやな村側の対応に、交渉は平行線をたどるばかりだ。村側の主張いわく「施設からの排水は飲める程安全」…ほんとかよ。（これは笑い話のようだが、その後の懇談説明会において、村長は「私は飲まない！」と言ったと言わなかったとか）

もう一つの反対動機として、建設予定地がいにしえから「神山」として住民に大切にされてきた山だということもある。おばは「たとえ若葉一枚手折るにもお伺いをたてたほどだよ」と言う。辺戸はその地味な印象とは裏腹に、琉球史にとって重要な史跡が数多く残るところだ。一例を挙げると、昨今の世界遺産ブームのおかげで見事復活を成し遂げた首里城の「若水取り」の儀式に使われる「若水」は、何を隠そうここ辺戸集落の裏手に流れる大川（ウッカー）の清水なのだ。もし処分場が建設されれば、この水だって汚濁を免れまい。私にはこれだけでも十分「建設しないでくれ」という理由になると思われるが、建設を急ぐ村にはこの訴えも届かない。

平行線をたどるばかりの村との交渉にぐずぐずしているうちに、なんと県は建設OKのハンコを押してしまった。住民にとっては晴天のへきれきであった。なんとかせねばと住民は弁護士を立てて建設差し止め仮処分申請に乗り出した。

ある日の早朝、私は電話で起こされた。仮処分申請のため辺戸の青年団が那覇までくるから、あんたも応援に来なさいとのことだった。呼ばれて出かけた那覇地裁玄関前広場。私の目に、まっかなTシャツ軍団が飛び込んできた。おじいもおばあも、みなお揃いのシャツに身を包んでいた。背中の「環境青年団」のプリントがまぶしい。聞けばそのTシャツは、青年団を応援する方々からの差し入れだそう。一行の団長は御年82。杖をつきながらの登場に、一団から拍手がわき起こる。ゆったり（ゆっくり？）一団の先頭に行くそのお姿は、頼もしくも微笑ましいものだった（少々不謹慎な物言いではあるが）。「子々孫々の代になって、なんでこんなものを作らせたかとおこられることのないように、安心して生活ができる故郷を守り抜こう！」拍手喝采のなか、感極まったのか涙ぐんでしまうおじい。

私が驚いたのは、その場に来ていた記者の数だった。取材陣だけでも青年団の数を軽く上回っていた。「これなら大丈夫」と思えた。無事仮処分の申請を済ませた一行は、その後、県庁を訪れた。県庁記者クラブ、県文化環境課（なんとも皮肉な名前です）を訪問し、辺戸の現状を力強く訴え続けた。なにせあの広い県庁ゆえ、時々行方不明者が出たのはご愛嬌。この日沖縄では、長い梅雨が明けた。

7月現在、村側は徹底抗戦の構えである。環境青年団のおじいおばあ達も、建設予定地近くにテントを設営し座り込みの抗議を始めた。山を守るために頑張る、おじいおばあたちを応援せずにはいられない。ごみを出し続ける生活から逃れられない私への、神様の肩たたきかも知れない。

8/22 追記

座り込みはすでに二ヶ月近く、毎日休みなしに朝8時前から夕方6時過ぎまで続いている。ご老体の上この猛暑で、しばしば身体の具合を悪くしてしまう人も出始めた。役所の担当者も出向いて来るけれど、土日は休み。しかし、業者は村から早期着工を確約させられているので、休むことはない。場所を離れることができない住民たちは、日程が重なってしまった集団検診すら満足に受けられなかった。そもそも村議会は、住民が同意した覚えのない同意書を振りかざし採決を強行した。環境アセスメントを実施することなく着工を許可した県側は、住民の訴えを聞き入れずに村側の全面的支持に回った。最後の頼みの綱、建設差し止め仮処分申請は、村側が資料提出を渋りお流れとなった。

やんばるは憂うつです。

■さあちゃん…現在コザ(沖縄市)に住むシンガーソングライター。
この文章および写真は、シマールマガジン「WANDER」の
HP版(<http://www.borderink.com/>)から、本人および制作者の
許可を得て転載しました。



やんばるの森が泣いている

去る9月19日、沖縄環境ネットワーク主催の「出前講演会」が沖縄本島北部の大宜味村で開催された。大宜味村は県内でも有数の「長寿の村」として有名だが、ごみの最終処分場計画や大保(たいほ)ダム建設等、豊かな自然環境をおびやかすプロジェクトが進行中の村でもある。この日は桜井国俊さんの講演と、村のいろいろな事業の現場の見学も行った。その報告も含めてレポートする。

●大宜味村見学レポート●

9月19日、ネットワークの世話人の一人である沖縄大学の桜井国俊先生と一緒に一路大宜味村に向かう。桜井先生は名護以北は初めてとのこと。

途中、松枯れが深刻な沖縄自動車道を経て、午後2時前、待ち合わせ場所の名護市源河へ。ネットワークの会員さんであり、今回の勉強会の受け入れ先でもある「大宜味のゴミ問題を考える会」の儀保昇さんの案内で、最初に次期の村最終処分場の予定地を見学。坂の途中にある空き地には、すでに「処分場建設反対」の看板が立っていた。儀保さんと、この予定地のすぐ上で「きゆな牧場」という乳牛牧場を営んでいる喜友名さんが説明してくれたところによると、この他にもあと3ヶ所の候補地があるそうだが、公開されたのはここだけだという。あとは村のどのあたりなのかわからないらしい。

説明を聞いて気になったのが、予定地のすぐ下流に県の取水場があるということだ。ここから取られる水は、無論南部の都市部へと供給されているので、これは単にやんばるの一自治体の問題ではない。

その後、きゆな牧場と養鶏場を見たあとで、現在村が計画している「大保ダム」の建設予定地へと向かう。大保ダムは1990年に事業がスタート、村が国や県に対して条件提示をしていたこともあって、今年の春に本体工事の調印がされている。

かなり山深いところに現場はあった。まだ周辺整備の段階だが、それでもかなりの木が切られている。剥げた山肌が痛々しい。聞けば、かなりの面積がダム湖として水没するようだ。そのことは、この後に行った見学者用の公園から見下ろした景色で、さらに実感できた。眼下に見える大規模な牧場ふたつが完全に水没するらしい。当然、牧場は移転ということになるらしいが、それほど簡単に移転が可能なものなのか、素人が考えても疑問である。

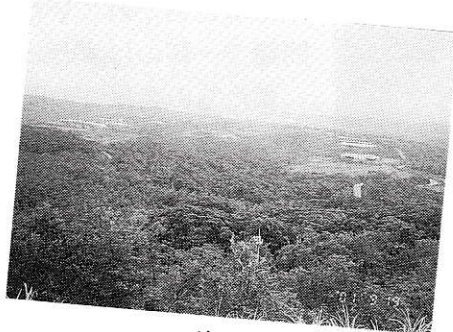
この後、不燃ゴミの処理場へと向かう。一面のゴミの山。不燃ゴミだけのはずなのに、なぜか悪臭とハエ、カラスの群れがすさまじい。分別が不徹底なので生ゴミが混っているのだ。またビールのアルミ缶をよく洗わないまま出しているの、その臭いもかなり強烈だ。この辺は村民のゴミの出し方のモラルが問われるところか。

見学の最後に名護市との境にほど近い塩屋湾の埋め立て予定地へと移動。大保ダムの工事が出る土砂で海岸線を埋め立てる予定らしい。奇しくもそこはウミガメの産卵地点だった。

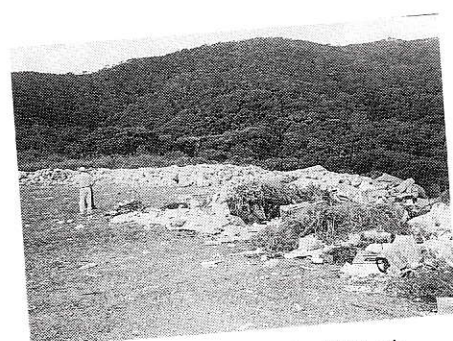
夕方、後発組と合流。一路、今日の会場となる喜如嘉へと向かう。ここは芭蕉布の織物の産地として、そして沖縄でも有数の長寿の集落として、全国的にも有名だ。こうして勉強会の前の現地見学は終了したのだが、この見学を通して改めて、やんばるの山は危機に瀕しているということを実感した。(事務局・酒井)



処分場予定地にて



7 ダムで水没する場所を俯瞰



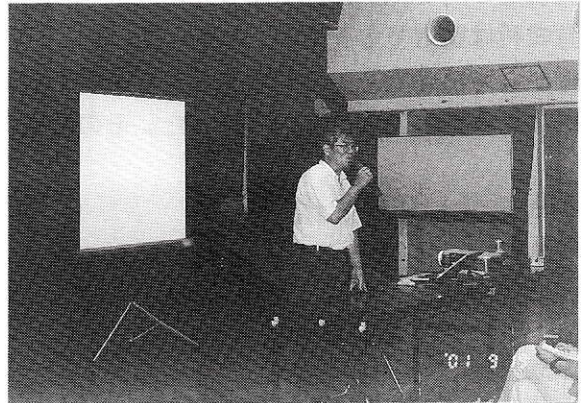
現在の不燃ゴミ置き場。臭かった



講演会を聞いて

儀保 昇（大宜味のゴミ問題を考える会）

「大宜味村で桜井先生の講演会をやらない?」と、環境ネットワークの世話人のひとりである仲西美佐子さんから話があったのは8月のことだった。以前に一度聞いたことのある先生の講演は、自らの経験を元にしての地域づくりの話から、世界大の環境問題に至るまで、歯切れのいいわかりやすいものだった。この時期、村民にはぜひ聞いて考えてもらいたかったので、すぐにこの話に飛びついた。しかもネットワークの主催なので費用もいらないという、できたばかりの私たちの会にとっては本当にありがたい申し出であった。



講演する桜井さん

いま大宜味村では一般廃棄物の最終処分場を造る計画があるが、その進め方があまりに不透明だ（他にもいろいろ問題のある村ではあるが…）。現処分場が基準に合わない野積み状態なので、新しい処分場が必要なのはわかる。しかし、当初平成15年の供用開始をめざしていたのに、村当局は村民に対して説明し意見を聞こうとしないし、村民の側からも積極的に関わろうとする動きがない。村づくりのせっかくのチャンスなのに、候補地のひとつの部落が地域エゴ的な反対運動をしているだけだ。これでいいのか。自分の村のことなのに、こんなに無関心でいいのか。

やんばるに住んでみて、住民の地域への関心の高さを感じることは、実はあまりない。住民の目は常に那覇を向いているようだ。私たちの会のメンバーも、ほとんどは他所から移住してきた者である。この村を終の住みかとして移って来た者にとって、黙っていられない現実がたくさんあるのだ。

10月19日の講演会には、約50人が参加した。村の職員も、担当者を含めて数人が来てくれた。担当者も悩んでいるようだ。桜井先生は、自らが関わった東京の武蔵野市を例にして、行政への関わり方を丁寧に教えてくれた。批判でなく対立でなく、協力であること。当局を上回るほどの提案をすること、その能力を持つこと。そして何より大切な「土地への誇り」を持つこと。みんな、これからの私たちが備えなければならないものである。そのことがよくわかった。身にしみた。村の担当者も感ずるところが大きかったと思う。



会場からも活発に意見が出た

お隣の国頭村の近ごろの出来事が村幹部の考えを変えたのか、ゴミ処分場の供用開始を、平成15年から16年へと一年延長した。村民の合意形成の大切さを痛感したのだろうか、今のところ村当局からの動きは全くない。（候補地の）選定委員会もずっと開かれていないようだ。いま、村長の頭の中は埋立て問題で一杯のはずだ。

私たちの会はこの間に、行政の民主的な進め方を追求すると共に、ゴミ問題をはじめとして、暮らしのあり方をも考える運動を進めていきたい。今回の講演会を企画して下さいました沖縄環境ネットワークのみなさん、ありがとうございました。

第5回沖縄県環境影響評価審査会傍聴記 内海正三（沖縄環境ネットワーク世話人）

前回8月21日、第4回沖縄県環境影響評価審査会の議事概要が配布され、その後の事務局と各委員の論議調整内容が報告された。

沖縄県環境影響評価技術指針（案）で沖縄県の独自性・特殊性を勘案する形で赤土等による水の濁りが調査項目の環境要素に入れられている。この点は評価出来るが、第4回の議論の中で、赤土の流出の影響に対して、新城委員（海生生物担当）から「赤土の影響は海にまで及ぶものであるが、それについてはどう考えたか」との質問に、事務局は「...河川生物に対して赤土の影響が少ないのであれば、そこから先の海域においても影響は少ないだろうと考えた」と答えている。

審査会終了後（傍聴者は発言出来ない）、事務局（県）の多良間主任に、「海では沈澱した赤土に因ってサンゴが死滅している。河川と海では状況が違うのでは」「また、海のサンゴに相当する河川の生物は何が想定されているのか」と問い質した。「沖縄は周囲がリーフに囲われて赤土が沈澱するので、影響が大きいと思っている。しかし河川でも影響は出るであろう。河川においてはその底生生物がサンゴに相当する。専門の新城先生が、もし問題が起きれば対応する」との答えであった。

関連するが、議事概要の14ページに副会長から「別表1から海域生物を敢えて削除したのは他の部局との調整の結果か」との質問があり、それに対して事務局が「県の関係部局及び総合事務局との調整の結果である。その中では、あくまで標準項目ということで調整を行ってきている。表に入れるとなると再度調整をしなければならない」と答えている。結局縦割り行政の妥協の産物になり、審査会のメンバーもそれ以上追及出来ないでいる。

第5回の審議の中で、備瀬委員から「調査・予測・評価の項目建てをしても、事業者がどの程度取り組むか、また、事前の予測と進行が変化しても、どの程度フォローできるものか。」との質問に、多良間主任が「環境影響評価は事業者がその予算や事業規模に応じて適当に行うもので、最初からこちら側が、

ああしろこうしろとは言えない。問題があれば知事から意見を言う」と答えている。それに対して備瀬委員は、環境影響評価のできる人材を幅広く育成し、環境配慮がその実を挙げる体制作りを進めるべきで、そうしないとやりっ放しの事業が増え、こんな筈じゃなかったみたいなことが起こる。事業者の意向ではあくまでも事業推進が前提になる、と反論していた。

この件でも終了後、多良間主任と議論し、県条例の拘束力について話した。彼は、事業者が自然環境に配慮を払わない場合、裁判等の手段もあるので、対応の仕方はあるとの立場であった。

環境審査会の位置付けでは、県条例の適用を受けた事案について審査するのが職務で、環境影響評価法の適用を受ける事案は環境省がやる。逆に沖縄県の環境影響評価等の実施手順には環境省は関係しないとの感覚で、棲み分けの意識が強く感じられた。実際は新石垣空港では、県の審査会が知事に対して意見を出し、それがアセスの重要なプロセスなのだが、審査会のメンバーにはあまりその事が意識されていない。

沖縄県環境影響評価審査会に神奈川県の場合、行政法である環境影響評価法の専門家が2名参加しており、沖縄県においても業務としては同じなので参加させるべきではないのかとの私の質問に、多良間主任は「沖縄県の情報センターに顧問弁護士があり、また必要に応じて審査会に専門家を参加させることができるので、常時法律の専門家の出席が必要とは考えていない。むしろ個々の自然科学の分野での議論が中心となると理解している」との回答であった。

最近の辺戸における廃棄物最終処理場問題の県の腰の引けた対応を見ても、積極的に環境保全を行う意識は低く、官僚的対応に終始している点を重視し、今後とも監視・チェックの必要性を感じた。



泡瀬干潟をめぐる市民運動

琉球湿地研究グループ代表 藤井晴彦

「もう泡瀬干潟がどこにあるかなんて説明しなくてもいい。もうみんな、泡瀬の問題を知っているんだ。」

9月15日、16日の両日、千葉で開催された国際湿地シンポジウム in 東京湾三番瀬で泡瀬干潟の現状を報告した沖縄野鳥の会の山城さんが、戻ってくるなり話し始めた。2年前、いや1年前でさえ、泡瀬の埋め立てが問題だと考えていた人は、どれくらいいただろう。大抵の人は、沖縄にそんな干潟があることすら知らなかったのではないだろうか。ほんのすこし前まで、問題を説明するのは本当に大変だったのだ。山城さんが興奮するのも無理はない。

すこし振り返ってみよう。干潟や海草場をフィールドにしている研究者や環境団体は、比較的早くから埋め立ては自然環境保全の立場から大変な問題だと考えていた。干潟に関わって生活していた人の多くも疑問を抱いていたに違いない。しかし、止まることのない公共事業への諦めの気持ちや手が回らないという事情で、誰も声を上げなかった。

環境アセスに対して市民が法的に意見を述べる唯一のチャンスであるアセス準備書の縦覧(1999年4月、5月)のとき、市民団体として意見を述べたのは『沖縄野鳥の会』だけである。『琉球湿地研究グループ』は、準備書の調査が極めて杜撰であることを指摘した(同年12月)が、言うべき期間が過ぎていているとして正式な意見として扱われていない。それでもこうした動きがきっかけで県議会に取り上げられ、すこしばつ新聞やテレビなどのマスコミも取り上げるようになっていくのだが、運動としては最初から後手である。

その後、沖縄市で、干潟に親しむ市民運動を展開しようとする『泡瀬の干潟で遊ぶ会』が結成され(2000年5月)、『沖縄環境ネットワーク』等を加えた複数の市民団体が連名で関係部局や省庁に対し埋め立て中止の要請や陳情を行なうようになった。

こうしたなか、運動が大きく発展するきっかけとなったのは、国際湿地シンポジウム in 沖縄(同年10月)だろう。あの藤前干潟埋め立て中止のきっかけと

なったシンポである(今年は三番瀬の埋め立てが止まったゾ!)。無理を言って誘致したのだが、同時期開催となった国際水鳥ワークショップとともに連日テレビや新聞で好意的に報道された。このころから環境問題と同時に、土地利用計画もクローズアップされるようになり、埋め立てには見過ごせない問題があることを人びとに印象付けた。

市民団体は事業主体である国や県に埋め立て事業の見直しを求めつづけていたが、結局、国と県は互いの事業を承認・認可した(同年12月)。そのため、埋め立て事業見直しを訴える『泡瀬干潟を守る連絡会』を市民団体等が結集して結成したとき(2001年1月)には、事業着工を待つばかりの状況になっていた。

すべてが手詰まりだと思えるなかで、唯一の光はようやく聞こえてきた市民の声だった。大学生の桑江君(2000年12月)や沖縄環境ネットワーク(2001年4月)が行なった市民アンケートは、声の存在を見事に証明した。多くの市民が埋め立てにNOと言っているのだ。『連絡会』は、声を頼りに住民投票を請求する運動を開始した(同年4月)。その結果、工事着工予定の8月に間に合わせようと、準備不足のままの強行スケジュールにもかかわらず、有権者の1割を越す約1万の請求書名を集めることができたのである。

振り返ってみると、いつも後手に回っていたように思える。それでもここまで運動が展開したのは、計画があまりに杜撰で問題が次から次へ露呈されていったおかげかもしれない。しかし、いずれにせよ結果として、こんな杜撰な埋め立て事業を許すわけにはいかないという声が高まっているのは間違いない。

先日、議会に否決された住民投票を再度請求するための市民団体『大事なことはみんなで決めよう住民投票市民の会』が結成された。住民投票は市民の声を生かす最良の方法だろう。『市民の会』には、これまでの運動の総括としても、市民主体の運動を展開してほしい。それができれば、もう後手は関係ない。主導権は常に市民の側にあるのだから。

「沖大祭をエコ学園祭に」という取り組みが、沖縄大学エコキャンパスクラブ呼びかけのもと始まっている。これまで、飲んで騒いで小遣い稼ぎの場であった学園祭に、環境対策を呼びかけること自体が珍しがられる状況である。

全国的な動きを見てみると、関東及び関西地域の大学を中心にエコ学園祭が実施されているのがわかる。1998年には「ゴミダイエット学園祭報告書」が、2001年には「ECO学園祭虎の巻」がエコ・リーグ(全国青年環境連盟)より発行されており、全国的にエコ学園祭ブームが起きていることを強く感じる。

学園祭は学生が自主運営していく一つの間であり、各大学の特殊性が表れると言って良いだろう。有名アーティストを招くことによって客を集める大学もあれば、ゼミや研究室単位による展示発表を主とし、同時にオープンキャンパスを開催し、大学の本来あるべき姿を学園祭を通して多くの人に見てもらおうと積極的に打ち出している大学もある。「学園祭を見ることによって、その大学がどのような大学なのかある程度わかる」という高校生がいた。現にそれが大学を受験する際の一つの評価基準にもなっていると言う。学園祭を企画運営していく立場の学生が、そのようなこともあると理解した上で取り組んでいるなら良いが、本学の場合はそうであるとは言い難い。

環境対策にしても同じことが言える。今やゴミの分別排出は当然の常識であるが、そのことさえもしっかり取り組めておらず、学園祭期間(3日間)で排出されるゴミ約10トンはごちゃ混ぜ状態のままなので、ゴミ収集業者に引渡し後はすべて埋め立て処分されていると言う。学園祭には実行委員会という組織が存在するので全体的な環境対策もここで方針決定していくべきなのだろうが、そのような詰めた議論もこれまで無かったようである。

今年5月、本学の「ISO14001認証取得プロジェクト」に学生の立場から積極的に関わるサークルとして、エコキャンパスクラブを発足させた。ISO14001という言葉は最近見聞きすることが多いと思うが、環境に与える負担を自覚し、それを減らしていくための努力をし、継続的に改善していく環境管理システムを確立した組織に与えられる国際規格のことである。沖縄県内の教育機関においてISO14001の認証取得を目指すのは本学が初めてである。大学全体として環境に配慮した運営を目指しているのに、学園祭だけ例外扱いという訳にはいかない。しかし、「学園祭は学生主体の運

営だから我々はあまり口出しできない」と返答する職員もあり、その辺りに学生と教職員の連携の悪さを感じる。

エコキャンパスクラブから学園祭実行委員会の会議で、環境対策の取り組み(まずはゴミ分別の徹底)を呼びかけて反応を見ているが、面倒なことはやりたくない、というのが本音らしく、良い返事は返ってこない。これまで取り組まれてこなかった環境対策だが、しかしこれは当然のこととして実施していきたい。学園祭開催まで残り少ないが、一部の学生による取り組みではなくて、学園祭実行委員会全体の共通認識のもとで環境対策に取り組んでいきたい。

エコ学園祭へ向けての取り組みとして、エコキャンパスクラブでは2つの目玉企画を用意した。1つめは、京都精華大学から学生を招聘しての「ゴミ組成調査」である。ゴミ組成調査において全国的に有名な京都精華大学から学生を招き、我々沖大生がノウハウを学び、今回の学園祭におけるゴミデータをとる。このデータは、次年度以降の学園祭ゴミ対策に有効に活用できるだろう。このデータを基にして、最も多いゴミは何だったのか、それを削減するための対策として何があるのか、など具体的に示すことが可能となる。この大変重要な調査活動を、京都精華大学の学生の参加及び招聘費用の資金協力をして下さる多くの企業・個人の皆さま支援のもと実施します。

2つめは、環境討論会「仮称:那覇市の家庭ゴミ有料化問題を考える」である。来年4月から那覇市は家庭ゴミの有料化に踏み切るようだが、市民からの反応がまったく返ってこない状況だ。新聞・テレビ・那覇市の広報誌でも取り上げられているが、読んでいないのか、関心がないのか、よくわからない。本学も那覇市にあることだし、遅かれ早かれ、多くの学生にも関わってくる問題である。幸いにも、この家庭ゴミ有料化会議(正式には那覇市一般廃棄物対策推進審議会)の会長が本学の桜井国俊教授なので、パネラーをお願いした。この他に、那覇市環境行政からお1人、ゴミ減量の活動をしておられる環境市民団体からお1人、計3人のパネラーを考えており、現在詰めめの作業を進めているところである。

エコ学園祭の実現へ向けて取り組んでいるが、結果的にどの程度になるか正直わからない。思ったような結果にならなくても、一石を投じることに大きな意味があると思う。次号で結果報告をしたいと思います。

日付	地域	ニュース項目	キーワード
2001年5月			
5月3日	沖縄市	泡瀬干潟を守る連絡会、見直しを求める一万人の署名提出	(新)埋立て
5月4日	国内	ジュゴンを希少種指定へ、環境省が保護区検討	(新)ジュゴン保護
5月6日	県内	海上保安庁第11管区、水中カメラ導入で不法投棄監視へ	(新)不法投棄
5月8日	県内	県内139の自動車解体業者のうち、産廃許可取得は2割弱にとどまる	(沖)リサイクル
5月9日	県内	家電リサイクル法施行から一ヶ月、予想上回る搬入	(新)リサイクル
5月10日	具志川市	市庁舎・芸術劇場など公共施設9ヶ所への省エネ導入決定	(新)省エネルギー
5月11日	那覇市	ゴミ分別の未徹底浮き彫り、那覇市長ら環境センターを視察	(沖)ゴミ分別
5月15日	県内	農水産業の魅力満載、グリーンツーリズムガイドブックを県が発刊	(新)エコツーリズム
5月16日	国頭村	ゴミ問題解決に老人の知恵を、国頭村辺戸区での取り組み	(新)ゴミ問題
5月19日	県内	全県的受け入れ窓口の設置提案へ、県内エコツーリズム	(新)エコツーリズム
5月21日	宜野湾市	マンガースなど移入動物による在来動物への被害拡大、「最悪事態」と警鐘	(沖)移入動物
5月21日	東京	東京で「沖縄平和まつり」開催、「ジュゴン保護」を訴える	(新)ジュゴン保護
5月22日	県内	ヤンバルクイナの生息域が減少、マンガースが原因か	(新)希少生物
5月22日	那覇市	新ゴミ処理施設建設の調査委託業務費を可決	(沖)ゴミ問題
5月22日	沖縄市	泡瀬干潟埋立て問題で住民投票に実施を求める本請求	(沖)埋立問題
5月24日	本部町	リュウキュウオオハコノハズク、ゴルフ場の地中に営巣	(沖)野鳥観察
5月24日	名護市	二見大橋整備工事で車エビ養殖に被害、賠償求め県を提訴へ	(新)海洋汚染
5月24日	宜野座村	ジュゴンを網から守れ ジュゴン保護委員会が漁業中の対処法を検討	(沖)ジュゴン保護
5月26日	県内	井戸から水銀・砒素、基準値の最大16倍にも。本島12地点で調査	(沖)地下水汚染
5月26日	石垣市	農家の7割が「自分の畑からも」。赤土流出に関するアンケート調査で回答	(新)赤土汚染
5月27日	沖縄市	「好き」「嫌い」あげ理想のオキナワ像描く 環境問題でワークショップ	(沖)環境問題
5月29日	那覇市	環境美化・省エネ狙う 沖縄大学でISO取得へ委員会発足	(新)ISO
5月30日	沖縄市	ゴミゼロの日 球陽高校生 中部の海岸で3年間調査 プラスチック粒子のゆくえ追う	(新)ゴミ問題
5月31日	石川市	リュウキュウアユを放流、名護市の源河川	(新)アユ放流
2001年6月			
6月1日	県内	リュウキュウアユを蘇生させる会が日本水大賞奨励賞を受賞	(沖)アユ蘇生
6月2日	沖縄市	東部海浜開発問題で見直し派議員に公開質問状を送付	(新)埋立て
6月3日	名護市	リュウキュウアユ稚魚2000匹奄美大島へ。名護市民、恩返しに贈り物	(沖)アユ蘇生
6月4日	名護市	ジュゴン保護基金のメンバーが普天間基地の移設先を目視調査	(新)ジュゴン保護
6月7日	沖縄市	子供NGO「わかつていーだ」が発足、モンゴルのマンホールチルドレンなど支援へ	(沖)環境問題
6月7日	沖縄市	「泡瀬干潟を守る連絡会」が、市議全員に議会態度を明確にとの公開質問状送る	(新)埋立て
6月7日	沖縄市	沖縄市が泡瀬干潟埋立てに関する市民投票条例を議会に提出	(新)住民投票
6月11日	国頭村	ゴミ処分場問題で辺戸区が建設差し止めの仮処分を那覇地裁に申請	(新)ゴミ処分場
6月12日	沖縄市	絶滅危惧種のクビレミドロ、移植技術確立せず。東部海浜開発地区	(沖)希少生物
6月12日	沖縄市	泡瀬干潟埋立て問題で沖縄市職労が議会へ市民投票条例の制定を要請	(新)埋立て
6月13日	国内	扇国土交通大臣、「泡瀬干潟の重要性は認識している」とのコメント	(沖)埋立て
6月13日	宜野湾市	市街地に米軍ヘリから落下物	(新)基地被害
6月18日	沖縄市	日本弁護士会湿地保全プロジェクトチームが東部海浜開発でヒアリング調査実施	(新)埋立て
6月21日	那覇市	ゴミ減量へ企業行脚、那覇市長が分別に協力求める	(沖)ゴミ問題
6月27日	県内	「8月着工問題ない」泡瀬干潟埋立てについて県土木建築部長が答弁	(新)埋立て
6月27日	石垣市	ハマサンゴが大量死。石垣・白保の轟川河口周辺	(沖)海洋汚染
6月27日	国頭村	ゴミ処分場、村議会で辺戸区に早期着工で可決。区の反発強まる	(沖)ゴミ処分場
6月27日	中城村	中北ゴミ焼却場の改築問題で住民から出されていた監査要求却下、住民が提訴へ	(新)ゴミ処分場
6月27日	国内	ジュゴンに加えウミガメ保護も求める。名古屋のNGO「自然の権利基金」	(沖)貴重種

日付	地域	ニュース項目	キーワード
2001年7月			
7月1日	石垣市	事業系生ゴミを利用して発電 バイオマスエネルギーの事業化を第三セクターが検討 (沖	代替エネルギー
7月2日	平良市	宇井研究室指導のモデル浄化槽が豚舎に完成し供用開始 (沖	浄化槽
7月3日	那覇市	NPOをわかりやすく 市民活動データブック・バージョンアップワークショップ開催 (新	市民活動
7月4日	名護市	羽地ダム 試験湛水を開始 (沖	ダム問題
7月4日	沖縄市	東部海浜開発市民投票条例を沖縄市議会が審議 (沖	埋立て
7月8日	県内	ジュゴン訴訟でNGOが原告団結成 (新	ジュゴン保護
7月9日	宮古	サンゴの健康チェック実施 宮古・八重干重 (沖	サンゴ保護
7月10日	那覇市	前島小学校で「ゴミ回収体験学習」 4年生の50人が参加 (沖	ゴミ問題
7月10日	県内	水銀3ヶ所、砒素7ヶ所で基準値超える 2000年度の県内井戸調査 (新	地下水汚染
7月15日	伊江村	「ゴミ焼却施設建設地変更を」 伊江村の計画に住民反発 (新	ゴミ処分場
7月15日	県内	環境市民団体が県内の参院選候補者にアンケート 公共工事見直しや基地関連で相違 (沖	環境問題
7月18日	沖縄市	沖縄市議会 泡瀬干潟埋立てに関する市民投票条例案を否決 (沖	埋め立て
7月18日	県内	「見逃すな不法投棄」 県と産業廃棄物協会などが合同で一斉パトロール (新	不法投棄
7月19日	名護市	辺野古活性化促進協が普天間代替基地問題で「埋立て工法」の採用を要請 (新	基地問題
7月23日	那覇市	環境汚染は身近な問題 識名小学校で「海の日」学習会 (沖	環境教育
7月24日	米軍基地	「沖縄の現状訴える」 沖縄国際大学生2人が国連先住民部会に参加 (新	先住民
7月24日	本部町	農地に大量の古タイヤ放置3ヶ月 (新	不法投棄
7月25日	沖縄市	沖縄市公害対策審議会 井戸水自粛の期間設定求める (沖	地下水汚染
7月28日	名護市	辺野古活性化促進協 集落の集団移転へ署名活動 (沖	基地問題
7月29日	糸満市	稚ガメ3匹を放流 米須小学校の5年生が海岸で人口孵化 (新	ウミガメ保護
7月30日	沖縄市	泡瀬干潟埋立てに64%が反対 市民団体が市民にアンケート調査 (沖	埋立て
7月31日	名護市	集団移転「総意ではない」。名護の移設予定地3区の合同委員会が会合で確認 (新	基地問題
2001年8月			
8月1日	沖縄市	藻類の移植を先行へ方向転換 泡瀬干潟埋立てで沖縄総合事務事務局 (沖	埋立て
8月1日	名護市	辺野古の集団移転問題 地元3区の合同委員会が「合同委の意見尊重」を県などに要請 (新	基地問題
8月1日	沖縄市	泡瀬干潟埋立て着工の開始延期に地元は複雑 (新	埋立て
8月2日	国頭村	村が辺戸区に着工通達 区民は予定地で座り込み抗議 (沖	ゴミ処分場
8月5日	勝連町	勝連町の津堅区、廃車処分場も前払い制を義務化。県内では初 (沖	廃棄物処分
8月7日	県内	沖縄本島沿岸のサンゴ白化現象拡大 高海水温が影響 (新	海洋汚染
8月7日	沖縄市	「比謝川を蘇生させる会」水資源功績者表彰受賞 (沖	自然と共生
8月7日	国頭村	辺戸区のゴミ処分場問題で村が現場で住民を説得 (沖	ゴミ処分場
8月8日	那覇市	那覇市による初のゴミ処理施設建設住民説明会で、減量化への疑問相次ぐ (新	ゴミ処分場
8月11日	浦添市	毎週、基地の撤去を訴え 米軍総領事館前で「金曜集会」始まる (沖	基地問題
8月12日	読谷村	オニヒトデ660匹駆除 残波ビーチ沖で (新	海洋汚染
8月14日	沖縄市	中部地区労組協議会 泡瀬干潟埋立てに関する住民投票条例制定実施に参加の意向 (新	埋立て
8月16日	具志川市	キャンプ・コートニーの鉛汚染問題で、石川市漁協具志川支所が藻場の移植を検討 (新	基地汚染
8月17日	具志川市	キャンプ・コートニーの鉛汚染問題で、石川市長が那覇防衛施設局に環境調査を要請 (沖	基地汚染
8月18日	石垣市	石垣市民38人 WWRのサンゴ保護センター「しらほサンゴ村」の自然観察会に参加 (沖	サンゴ保護
8月18日	沖縄市	泡瀬干潟を守る会 市民投票条例制定を訴えるシンポジウム開催 (沖	住民投票
8月21日	大宜味村	塩屋湾埋立て事業で計画の一部変更 ウミガメに配慮 (沖	ウミガメ保護
8月24日	名護市	ジュゴン名護キャンペーンセンター キャンプシュワブ沿岸での訓練に抗議 (沖	ジュゴン保護
8月26日	那覇市	「水資源を次世代へ」河川文化フォーラム開催 (沖	水資源
8月27日	沖縄市	日本蜘蛛学会 ヤマトウシオグモの生息確認で泡瀬干潟の埋立て中止を決議 (沖	希少生物
8月30日	県内	松くい虫 5年で根絶めざす 県農林水産部 (新	害虫被害
8月30日	慶良間	サンゴ白化 慶良間諸島でも確認 (沖	海洋汚染
8月30日	国内	ジュゴン 初の広域生息調査に環境庁が予算計上の方針 (沖	ジュゴン保護
8月31日	石川市	養豚団地建設で住民投票に向け市民479人の署名提出 (沖	悪臭被害

環境情報おきなわ(2001年11~12月)

◆泡瀬干潟関連情報

・海螢ツアー

冬の新月の日泡瀬の干潟を散策するという
シンプルなツアー。

問合せアドレス awasekyousei@hotmail.com

- ・泡瀬干潟を守る連絡会の会合は毎週月曜日に開催
しています。

TEL/FAX 098-921-4455

◆クリーンビーチクラブ

海浜清掃等を行っています。

詳しいことは下記にお問い合わせ下さい。

Tel.098-964-2517 エド・サンチェス

Tel.098-958-4128 ケニー・イーマン

◆沖縄リサイクル市民の会

- ・フリーマーケット in パレット久茂地

日時：毎月 第4日曜日 午前10時～午後1時

場所：パレット久茂地 2F P デッキ

出店希望者は1ヶ月前に要予約

[問い合わせ先] Tel/Fax 098-886-3001

E-mail: ktomo@ryucom.ne.jp

<http://www.ryucom.ne.jp/users/kuru2>

◆安謝川をきれいにする首里住民の会

- ・安謝川クリーン大作戦

活動日時：奇数月第4土曜日 午前10時～12時

集合場所：末吉公園内 花見橋

軽装、ゴム長靴を用意してご参加ください。

- * 詳しい日時は下記にお問い合わせください。

[問い合わせ先] Tel/Fax 098-884-1915 石野桂子

◆環境ネットワーク奄美

[問い合わせ先] 環境ネットワーク奄美 菰 博明

Tel/Fax 0997-53-5713

◆沖縄の情報がいっぱいインターネットマガジン

「さうすウェブ」

<http://www.atlas.co.jp/swave>

◆【書籍販売】 郵送します

◎『沖縄の環境と平和』 価格 1,000円

◎『低周波音公害調査』報告書1部 500円

◎『沖縄から世界へ』 価格 1,000円

◆沖縄環境ネットワーク世話人会 参加自由です！

日 時：毎月第1又は第2水曜日：午後7時～

場 所：沖縄大学3号館402教室(変更の場合あり)

年会費：個人会員：3,000円 学生会員：1,500円

家族会員：3,000円 団体会員：10,000円

特別賛助会員：100,000円

郵便振込先：(口座番号) 02010-9-20132

(加入者名) 沖縄環境ネットワーク



【編集後記】

今回、新たに事務局を担当することになりました。この16号の作成が初のまとまった仕事となったわけですが、パソコンは以前から触っているとはいえ、随分これまでと勝手が違うのに戸惑ってばかりで、ようやく出来上がりそうな原稿を前にほっと一息ついているところです。忌憚のないご意見・ご感想をお聞かせいただければ幸いです。

なお、今回から事務局の連絡先が宇井研究室から岡本研究室へと移りました。ご連絡等は下記岡本研究室までお願いいたします。宇井先生にはこれまで通り世話人としてお世話いただきますので、ご安心下さい。

アメリカの同時多発テロは、あらゆる方面に大きな影響を及ぼして、ここ沖縄でも基地周辺の警備が厳しくなっています。しかし、それより深刻なのは「沖縄離れ症候群」とでも呼べるような沖縄旅行キャンセルの嵐です。その心中は理解できなくともありませんが、寂然としないものを感じるのも事実です。先日の沖縄タイムスの社説の結びにあったように、「問うべきなのは『基地沖縄』と本土との関係なのかもしれない」と思えてなりません。(酒)

沖縄環境ネットワーク通信・第16号

「おきなわ環境ネット」

2001年11月5日発行

発行 〒902-0075

那覇市国場555番地 沖縄大学岡本研究室

沖縄環境ネットワーク

TEL/FAX 098-832-3224

E-mail: okamotok@okinawa-u.ac.jp

発行人 宇井 純 編集 酒井 哲哉

<http://homepage1.nifty.com/okikan/>

30f-56f

310